

# 学校教育における ジェンダー視点の重要性

ジェンダー平等は、SDGsの5番目の目標として挙げられている世界共通の目標です。しかし、日本のジェンダーギャップ指数は、146か国中116位(「The Global Gender Gap Report 2022」世界経済フォーラム)で、世界標準には届いていません。

そこで、ジェンダーと教育をご専門とされている片岡洋子先生をお招きし、土田雄一先生、瀬戸山博子先生と座談会を実施しました。今回は学校教育におけるジェンダー視点の重要性、次号は道徳教育とジェンダーについて、2号連続でお話いただきます。



千葉大学  
名誉教授  
片岡 洋子



千葉大学  
教授  
土田 雄一



倉敷市立  
倉敷南小学校教諭  
瀬戸山 博子

## ジェンダーとは…

**片岡**：ジェンダーの定義で大事なのが、「ジェンダーは社会的・文化的につくられたもの」という点です。そのジェンダーが、誰かを差別したり、誰かの可能性を妨げたりするのであれば、人間が作り変えられることを表した概念なのです。

ジェンダーとは、既存の社会や文化の枠にはめるのではなく、社会や文化を変革することを求める概念と言えます。

**土田**：この社会的・文化的につくられたものということをおさえておかないと、本質が見えなくなってしまうんですね。ジェンダーを学ぶうえで、学校教育が重要という点については、いかがでしょうか？

## 学校教育におけるジェンダー

**片岡**：子どもたちは、生活の中ですでにジェンダー化されています。幼い頃からおもちゃや洋服、髪型などによって男の子・女の子に分けられて、自分は男の子、または女の子だというアイデンティティとともに、すでに「こうすべき」という規範が入っているわけです。私が、附属小学校長るとき、小学1年生に「どうして校長先生が女で副校長が男なの？ ふつうは逆だよ。」と言われたことがありました。その子はなぜ、

どのような経験から男が上で女が下と思い込んだのでしょうか。

常識にとらわれずに視点を広げ、世界は多様でもっと自由に生きられる方向に向かっていることを教え、保証していくことが、学校教育に必要なと思います。

**土田**：ジェンダーの枠を取り払うことがよりよい社会をつくる源になる。そのための教育を学校で進める必要があるということですね。現場でのジェンダーに関する教育や実態はどのようになっていますか？

**瀬戸山**：ジェンダーの考え方は、性の多様性から入ってきている感じがします。実際にカミングアウトした子どもがいて、「みんなで性の多様性を認めていこう。一人ひとりを大切にしていこう。」という教員向けの研修などもありました。ただ、頭ではわかっているけど、一人の人間として、自分を変えることが難しく感じる部分もありました。

**土田**：これまでにいくつか段階があったと思います。一つは無意識の段階。ジェンダーに対する意識が全くなく、今までの文化や習慣にとらわれ、「こうあらねばならない」と思っていた時期です。今はきちんと正しい知識が入ってきて、教員研修もあります。ただ、知ってはいるけれど、教員側の意識はまだ変わっていないのが現状なのかなと思います。

**片岡**：ジェンダーは行為遂行の中でつくられるものです。つまり、学習して認識が新たになるというより、

日々の生活の中で行為や関係をつくり変えていくことを通して、ジェンダーの変容が行われていきます。ジェンダーは、その人の生き方と大きく関わるものなのです。

## 教育現場が変わるために

**土田**：ジェンダーを含めた人権問題を考えるときに、特別支援教育の導入の話を思い出します。発達障害のある児童生徒に対する理解が進まなかった時代もあったのですが、最初は「そうはいってもわがままだ」という理解だった人も、10年くらいかけてだんだん変わってきたのです。ジェンダー平等についても、20年以上前に大きく取り上げられましたが、なかなか学校現場に浸透しませんでした。

**瀬戸山**：小学校では、名簿を男女混合にしたり、絵の具セットや水泳バッグの色などを見直したりしました。ただ形だけで、本質的な部分、つまり「一人ひとりを大事にしましょう」という人権の部分までは行き届かなかった印象です。

**片岡**：ジェンダーの考え方が誤解されて、なかなか浸透しなかった時期もありました。一人ひとりが多様な選択ができることがジェンダー平等な状態であって、男女の区別をなくして同じにすることではないのです。



一人ひとりが好きなものを選べる状態にする。

**瀬戸山**：LGBTQを公表された先生が赴任してこれたことがありましたが、大人より子どもたちの方が適応が早かったですね。先入観が少ない方が、人はそれぞれ違うということ、すんなり受け入れられるのだと思います。

**土田**：ランドセルの色は、いろいろな色や形があって当たり前だという感覚が常識になっていますよね。このように常識化していくことが大事だと思います。

**瀬戸山**：呼称を「さん」にするのは常識になってきました。また、制服も、一部条件付きですが、男女の区別なく選べるようになりました。家庭科でナップザックを選ぶときも、ピンク色のものを男の子が選んでも、ほかの子は何も言いません。こういう状況が、当たり前になってきていると思います。

**片岡**：一方で、教員が「男子は机運んで、女子は国旗たんで。」と指示したり、「その男子うるさい！」と注意したりしているのを聞いたことがあります。学

校側が性別でのカテゴリ分けを便利に使っていないか、見直す必要があると思います。

**土田**：校則や髪型なども最近見直されてきています。ジェンダーについても、変わる土壌が育ってきているのではないのでしょうか。

**片岡**：実際に研修を行って思うことは、性の多様性への対応が課題になってきたことが、ジェンダー平等について考えるきっかけになっているということです。

文部科学省のさまざまな通知によって、学校現場は、幅広く多様な性を生きる児童生徒にきちんと対応することを求められています。その通知を基に研修が実施され、研修を重ねることで先生たちの人間性についての認識が変わってきています。

**瀬戸山**：研修を受けることで、その子の個性を受け入れられない自分たちの方がおかしいという発想の転換につながります。今までの「枠にはめないとだめだ」という教育から、「一人ひとりに合わせた教育をしよう」という柔軟な考え方に変わっていくとすてきだと思います。

**土田**：知識としてのジェンダーの理解から、次第に体験行動として、それが身についていくような理解へと深まっていく。その過渡期にあるんですね。

**片岡**：講師として伺った学校の校長先生が、「男は男らしく、女は女らしくというのがなぜだめなのかとこれまで思っていたけれど、今日の話を聞いて、もしかしたら今まで知らないうちに子どもたちを傷つけたり苦しめてきたのではないかと、すごく反省しました。」とおっしゃっていました。

性の多様性を入り口にして、「ジェンダーの枠にはめない」ということの意味が伝わります。男女の垣根をなくして同じタイプの人間をつくるのではなく、一人ひとりを大切にしようとしたときに、ジェンダーという枠で、その人の選択肢を奪ってしまったり、行動を制約したり、価値観を固定したりすることがないようにするという点なのです。

**土田**：ジェンダーに限らず、学校での教育がすべての子どもたちに優しい教育になることを願っています。

## まとめ

- 1 世界は多様で、自由に生きられるということをお教える必要がある！
- 2 男女の区別をなくして同じにするのではなく、一人ひとりが多様な選択ができる状態にする！
- 3 指導の際に、「性別」というカテゴリを便利に活用していないか見直してみる！

